新治廃寺

――久地楽長町窯跡予備調査報告書――

1984・3

茨城県真壁郡協和町教育委員会

上　１号瓦窯跡　　下　１号銅製錬炉

序　　文

協和町の歴史は無土器時代にはじまり，縄文時代以来の祖先の足跡が町内各所に数多く残されており，文化財の宝庫と言っても過言ではないと思います。

このたび，工房跡と思われる新治廃寺跡関連遺跡「久地楽長町遺跡」の予備調査を実施し，ここに多くの成果を得られましたことは，文化財保護を推し進めるうえで大変重要な調査であったと思います。

この報告書が教材として，学校教育や社会教育に活用されるとともに，町民の文化財に対する認識をなお一層深めることになるものと念じております。

なお，このたびの調査にあたり，関係各位の御協力，御指導をいただきましたことを，厚く御礼申し上げます。

昭和59年 3 月27日

協和町長　浦　井　亀　三

凡　　例

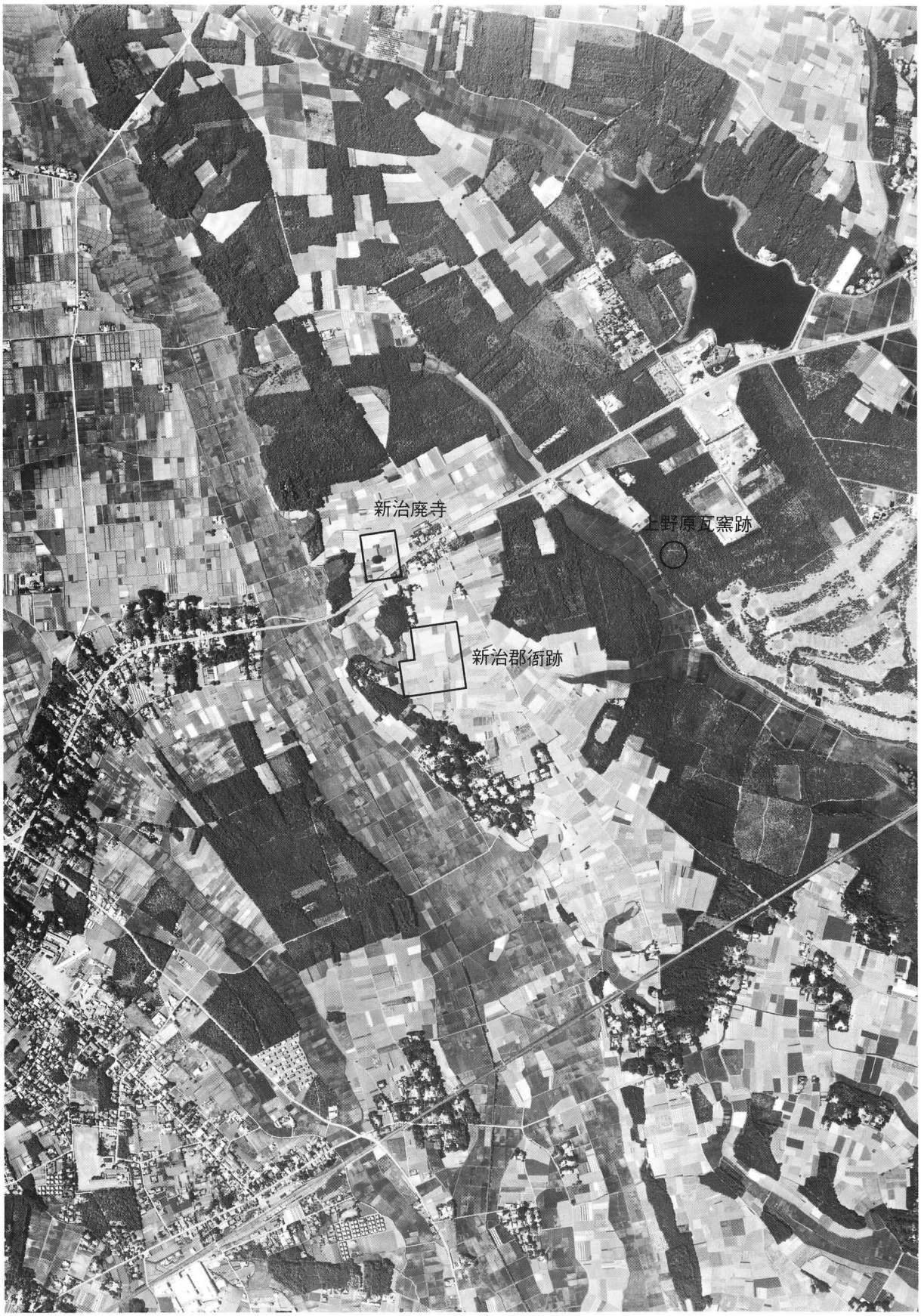
1　昭和58年５月21日から３日間の予備調査報告である。

2　調査体制は高井悌三郎氏を調査主任として，町文化財審議委員，領域研究会が調査にあたった。

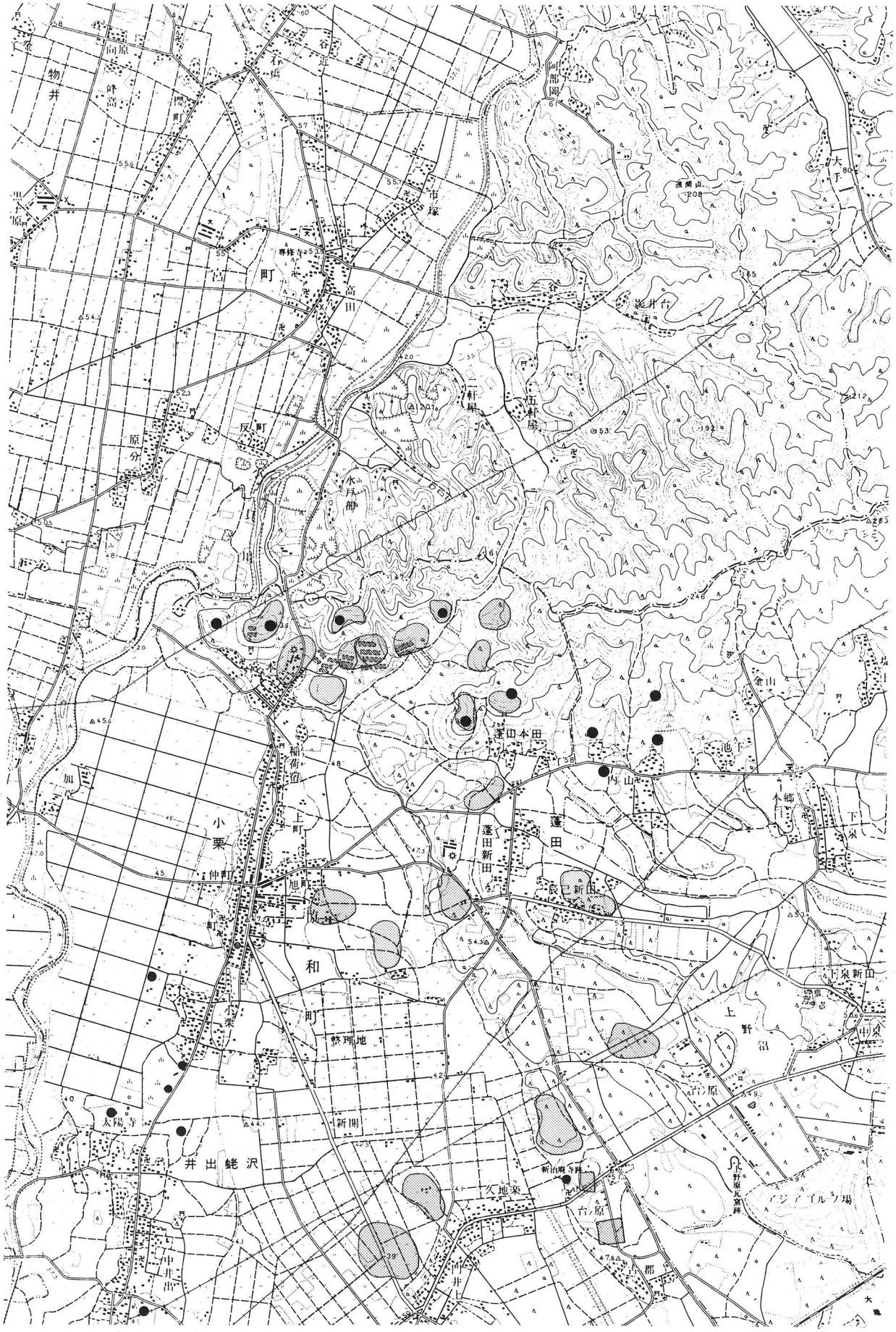
3　今回の予備調査は，遺構の性格を把握するだけにとどめた。

4　調査後の整理，実測，拓本，写真撮影は領域研究会がおこなった。

5　本書の編集責任は領域研究会にある。



新治廃寺　新治郡衙跡関連写真


物井
峰
町
市塚
高田
専修寺
五軒屋
原分
水戸部
蓬田本田
蓬田
蓬田新田
内山
池下
郷
下泉
上泉新田
上野沼
古原
新田
稲荷宿
上町
小栗
仲町
旭町
和町
整理地
新開
太陽寺
井出蛯沢
久地楽
新治廃寺跡
野原瓦窯跡
アジアイルカ場
中井出
井上
古都
大手

遺跡の環境

「新治の郡　東は那賀の郡の堺なる大き山，南は白壁の郡，西は毛野河，北は下野と常陸と二つの國の堺にして，卽ち波太の岡なり。古老のいへらく，昔，美麻貴の天皇の馭宇しめししみ世，東の夷の荒ぶる賊俗，阿良夫流爾斯母乃といふを平討たむとして，新治の國造が祖，名は比奈良珠命といふものを遣はしき。此の人罷り致りて，卽ち新しき井を穿るに，今も新治の里にあり。隨時祭を致す。其水浄く流れき。仍ち，井を治りしに因りて，郡の號に着けき。爾より今に至るまで，其の名を改めず。風俗の諺に，白遠ふ新治の國といふ。（以下略）」と常陸国風土記に記載されている。この新治国は律令期には常陸国新治郡となる。和名抄では新治郡に「坂門，竹島，沼田，伊讃，博多，巡廻，月波，大幡，新治，下真，巨神，井田」の郷名がみえる。

新治郡の郡の役所は現在の古郡北原にある国指定史跡新治郡衙跡であり，その郡の寺が久地楽にある国指定史跡新治廃寺跡である。これらの遺跡は昭和14，16年にかけて，藤田清，高井悌三郎両氏によって発掘調査され，『常陸国新治郡上代遺跡の研究』1944を上梓している。

協和町の遺跡分布図をみると，北寄りに遺跡が集中してみられる。このことは地勢との関係が考えられる。北部は浅間山の支陵の先端部が小貝川に接しており，この丘陵上に遺跡が集中する。小栗浦山，宮本のオッコシ遺跡からは先土器時代の資料が出土しており，谷島静訓「宮本のプレ縄文石器について」『古代常総文化』1955に報告されている。

縄文時代の遺跡は，小栗地区に多く遺存しており，宮本A～C遺跡，らいさま山，七ツ池東方A・B，旧小栗中学校内，中台，蓬田，石畑，蓬田東原一区の各遺跡があり，その他には久地楽台，横塚古堂遺跡がある。しかし小栗地区は別にしても，観音川と小貝川にはさまれた門井付近から南には，小支谷が発達した台地がみられることや，他の地域の遺跡分布とも考え合わせると，必ず未確認の遺跡が分布しているはずである。このことは縄文時代に限らず，奈良・平安時代まで同じ傾向をもつものと思う。弥生時代以降，すなわち稲作文化以来小栗地区は，地形的にみて，生活の場としてのみ限定されて利用された地域ではなく，この地域には古墳が多く，また，火葬墓，経塚などが多くみられることから墓域的な性格をもっていた地域と考えられる。この古墳の中でも，新治廃寺の北約700～800mにある古郡台古墳は，昭和43年に調査された。同古墳の主体部は無裾の横穴式石室で，羨道と玄室の堺に立石を入れ，玄室はそのまま棺ともなっている。床面は小石が敷きつめられている。両側壁は板石の小口積みをしているが，奥壁は1枚である。玄室には，人骨，耳飾り，剣，鉄鏃が出土している。人骨は50歳前後の男性と鑑定されている。石室の形状，副葬品等から，当古墳の年代は7世紀末頃と考えられ，新治国造の後裔である大領家の人の墓と思われるものである。廃寺，郡衙が存在する時期の集落としては，廃寺の西対岸にある久地楽試験場内遺跡がある。

久地楽長町遺跡は郡の寺を建造するための工房跡群であり，特に瓦窯は，岩瀬町上野原瓦窯跡，内山瓦窯跡と同じ時期に操業されていたようであるが，窯跡の広がりは今後の調査を待たねばならない。瓦窯跡に近接してみられる銅製錬遺構については，断面観察だけであるため，その形状，性格は明確ではないが，炉に使用された瓦は，瓦窯跡出土のものと同時期であることから，郡の寺に使用する銅製品を作るためのものと考えられる。

遺　　構

今回の予備調査の目的は，削平された後の遺構遺存状態を調べることにあったため，報告する遺構は，瓦窯跡が平面プランと遺物の状況図，銅製錬炉跡は切断された断面土層図と，遺構の断面観察図だけになる。いずれ正式な調査がなされることを想定して，遺物等については現状のままで保存を図った。

遺構が確認された場所は，標高36ｍから40ｍの西に傾斜する浅い支谷部で，水田面との比高差は４～８ｍである。新治廃寺域の北西コーナは，今回確認された遺構から約100ｍ東にあたり，寺域と近接しているのが特徴である。

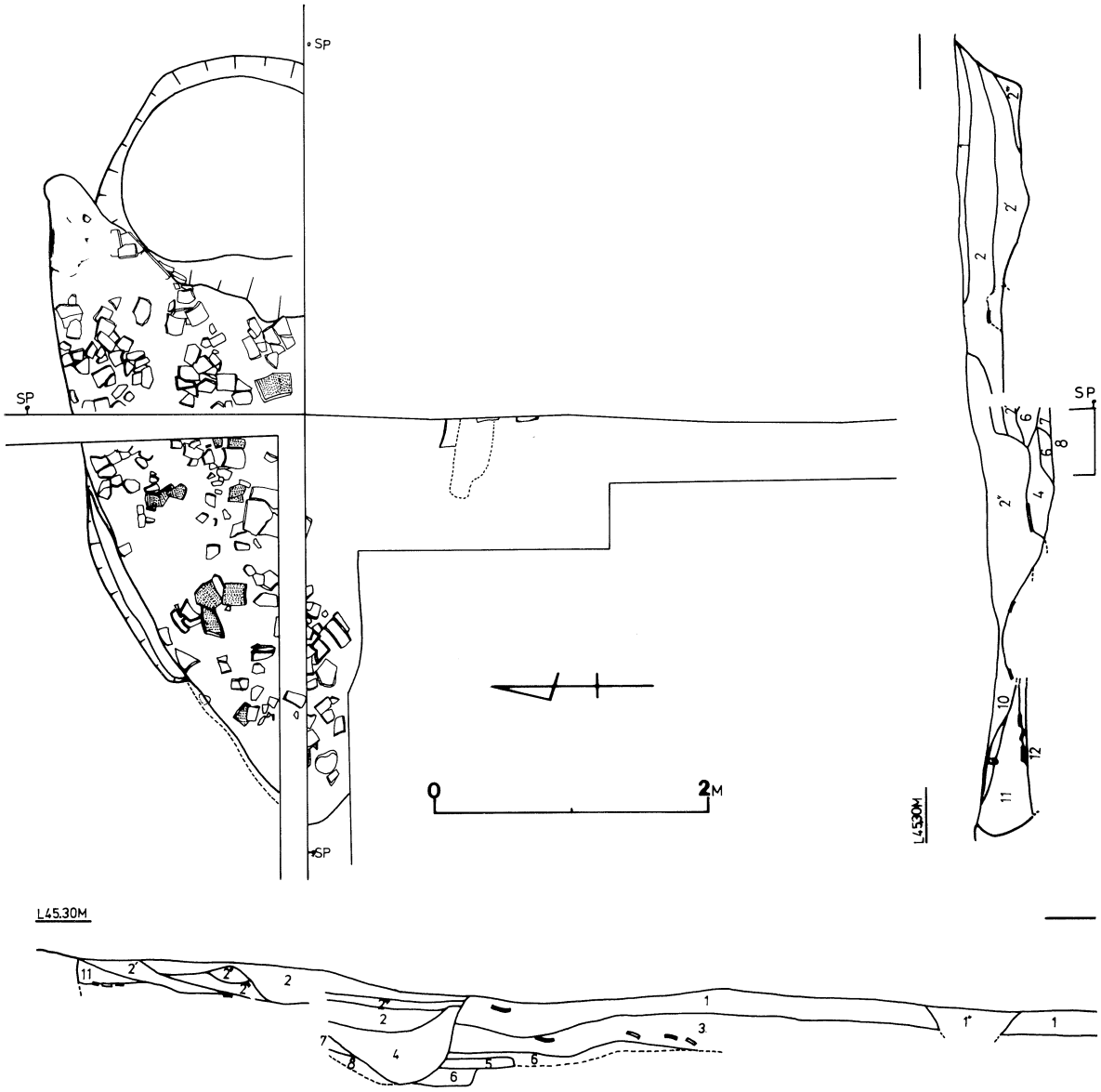
１号瓦窯跡　削り取られた部分に図版２上段のような落ち込みがみられ，覆土内に木炭，焼土，瓦片などが入っていることから，南北方向の傾斜に沿って窯が位置していると考え，中央にセクションベルトを残すようにして調査を進めたところ，南側の部分は，後世の攪乱を受けた状況を呈し，この部分は窯壁の南側一部を崩壊していることが判明した。このことは，第２図の断面にみられるように窯跡を切断した状態がみられる。土層中には木炭，焼土がブロック状に入る。

窯の確認面最長は５ｍで，最大幅は約２ｍである。窯壁の上部は土取りにより削られてしまっているため，窯底に近いラインが残っているものと考えられる。確認できた部分は窯尻と煙道，それと焼成部である。焼成部は瓦を残しているので，底面の形状は確認してない。煙道はわずかであるが立ち上がりが確認できたが，残りが少ないため上部の形状は不明である。窯全体の形状は，舟底形を呈しており，ボーリング結果では，底面は登り勾配をもつものと思われる（第２図）。

銅製錬炉跡（１号）緩斜面の中にまずローム土，白色粘土を約1.6ｍ程掘り込み，焼土，礫，灰などを混じた土を互層に埋めてゆき，掘り込みの中間付近で，白色粘土と瓦によって炉の最下底部を形成し，再度白色粘土，スサ入り粘土により炉を形成している。断面でみる限り右側の炉を最初に作り，その後左の炉に作り変えているのがわかる。なお，どの時期に作られたかは不明であるが掘り込みを埋めた後，配水路を作るため埋り込まれており，配水路内には瓦片が敷きつめてあり，暗渠となり，西側水田の方向にまで続いている。炉の構築状況からみても，炉構築前に設置した可能性をもっている。炉壁には銅の付着が顕著で，銅滓，鉄滓も出土している（第３図）

２号炉　１号炉の西側に位置し，断面にわずかに確認されている。炉の形状は不明である（第３図）。

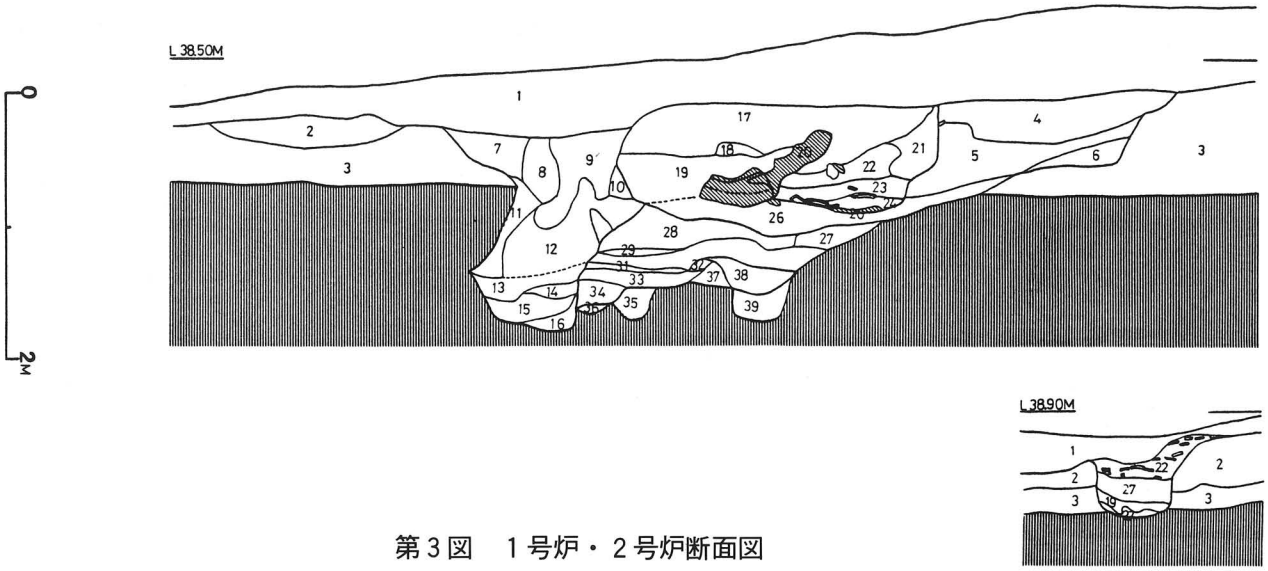
遺構の時期についてみると，瓦窯跡はⅠ期瓦が多くみられることから，創建時には操業を開始していたと考えられる。銅製錬炉１号は，創建時の瓦を使用していることもあり，瓦窯跡と同じ頃には操業していたものと思われる。



第２図　瓦窯跡平面図，断面図

土 層 解 説

1. 黒褐色粘質土 — 木炭・灰を含み二次堆積
2. 明茶褐色土 — 耕作土。
2′. 〃 — 耕作土に黒色土が混入する。
2″. 〃 — 耕作土に焼土・黄灰色粘土が混じる。
2‴. 〃 — 耕作土の中に黄灰色粘土が混じる。
3. 暗黒褐色土 — 木炭・瓦等を含む。(二次堆積)
4. 黄茶褐色土 — 黄白色粘土が混じる。
5. 赤褐色焼土塊 — 窯壁で移動されたもの。
6. 黄褐色粘土 — 黄白色粘土が渇じる。
7. 黄白色砂質土 — 地山。
8. 黄白色粘質土 — 〃
9. 青灰色焼土 — 窯壁。
10. 赤褐色焼土 — 窯壁。
11. 黄褐色土 — 窯壁が混じる。
12. 窯　　床



第３図　１号炉・２号炉断面図

1　表土(耕作土)　茶褐色土，焼土粒，瓦片，細礫（１cm前後）を少量含。ややしまっている。
2　黄褐色土　ローム層，ややしまっている。
3　灰白色土　細礫混入の粘土層（粘質）。
4　黄褐色土　粘土ブロック，ソフトロームブロック，礫少量含。木炭粒，硅石粒多量含。ややしまっている。
5　黄褐色土　ソフトロームブロック多量含。礫，焼土少量含。硅石粒壁側にやや多くみられる。しまっている。
6　褐色土　ロームブロック少量下部に堆積。礫，粘土ブロック極少量含。硅石粒多量含。しまっている。
7　茶褐色土　焼土粒，瓦片極少量含。粘土少量（ブロック化）含。Ｉ層の流れ込み少量。細礫，木炭極少量含。
8　黄褐色土　ロームやや多量含。礫，硅石粒，焼けた粘土(黒)，焼土粒，木炭極少量含。しまっている。
9　暗褐色土　ローム粒，焼土粒，粘土粒，硅石粒，細礫少量含。瓦片(上部層に堆積)。しまっている。
10　褐色土　ローム粒，粘土粒，硅石粒，礫，木炭粒，コークス粒，少量混入含。しまっている。
11　暗赤褐色土　焼土灰，木炭多量含。粘土，礫やや多量含。全体的にポロポロしている。
12　黄灰褐色土　ローム多量含。粘土ブロックやや多量含。焼土ブロック，硅石粒少量含。粘質あり。しまっている。
13　褐色土　ローム，粘土ブロック多量含。瓦，木炭，焼土極少量混入。ややポロポロしている。粘質土層。
14　灰褐色土　粘土多量含。灰やや多量含。木炭，焼土極少量含。ポロポロしている粘質土層。ローム少量。
15　暗灰褐色土　粘土多量含。灰やや多量含。木炭，瓦片極少量含。
16　青灰褐色土　粘土多量(礫を多く含む地山)含。堅い。
17　褐色土　ローム，粘土粒やや多量含。礫，硅石粒少量含。瓦片極少量含。焼土，木炭少量混入。しまっている。
18　赤褐色土　（焼けたローム粒）焼土多量含。細礫，木炭極少量含。堅くしまっている。
19　暗褐色土　粘土粒多量含，焼土粒やや多量含。硅石粒，細礫少量含。木炭極少量含。しまっている。
20　暗灰褐色土　粘土粒多量含。硅石粒，ローム粒，礫やや多量含。ややしまっている。
21　褐色土　ローム粒，細ロームブロック少量含。粘土粒，木炭粒，焼土粒，硅石粒少量混入。ややわらかい。
22　黄褐色土　ローム粒，粘土ブロックやや多量含。瓦片，焼土，木炭極少量含。ややしまっている。
23　灰褐色土　細礫，木炭，焼土，粘土粒やや多量含。ポロポロしている。やわらかい。
24　灰褐色土　23とほぼ同じ。ややローム多量含。サラサラした感じの層。スラグ，灰やや多量混入。
25　灰褐色土　粘土，粘土ブロック多量含。灰，ローム少量含。瓦の下部に灰多量含。しまっている。
26　褐色土　粘土ブロック，ロームやや多量含。灰，焼土，木炭，硅石粒全体的に含。しまっている。
27　黄褐色土　ローム土，粘土ブロックやや多量含。ややしまっている粘質土層。
28　暗褐色土　粘土ブロック，粘土多量含。ロームブロック，灰，木炭，礫やや多量含。ややしまっている。
29　黄褐色土　ローム多量含。灰，粘土，木炭やや多量含。しまっている。
30　黄灰色土　礫を多く含む粘土層。ローム少量含。木炭，硅石粒極少量含。しまっている。
31　黒灰色土　木炭，灰多量含。焼土粒，粘土やや多量含。ややわらかい。粘質土層。
32　黄灰褐色土　粘土，焼土やや多量含。しまっている粘質土層。
33　茶赤褐色土　灰，焼土粒，粘土粒多量含。ややわらか粘質土層。
34　黒灰色土　粘土，灰，木炭多量含。焼土粒やや多量含。ポロポロした粘質土層。
35　暗灰色土　粘土，粘土ブロック，灰，木炭やや多く混入。ポロポロした粘質土層。
36　黄灰色土　木炭を少量含む粘土層。
37　灰褐色土　礫を含む粘土層(地山)。堅い。
38　黄灰色土　礫を含む粘土層。
39　灰褐色土　微細礫混入の砂質層(地山？)。

遺　　物

遺物は瓦を主とするが，予備調査ということもあり，遺構内での細分化はしていない。１号瓦窯跡は，窯内を４分割し，各区ごとに取り上げたが，削平による土混入により，窯内の瓦の状況が明確になった段階で瓦の取り上げを中止し，現状のまま残している。それ以外のものは，１号瓦窯跡の灰原になる部分のもので，１号瓦窯跡の方向が確認できない時，この部分を２号瓦窯跡としたため，一部の遺物は２号瓦窯跡で整理されている。１号炉出土の瓦は，炉壁の基礎に使用されたものと，炉の配水路内に暗渠にするため埋め込んだものである。

軒丸瓦　複弁花文と単弁花文の２類に分けられ，周縁はいずれも素文縁の内側に面違いの鋸歯文を帯状に廻らせている。

Ⅰ類Ａ群鋸歯文縁複弁八葉花文軒丸瓦（第４図１・２）　八葉の複弁は間弁を入れずに並び，花弁はほそながい弁子をつつむ二重の輪郭線から成る。弁子は長く肉乗りし，輪郭は弁端で広くなって反る。２本の輪郭線は弁端で太くなるが，鋭い線で構成されている。花弁のつけねは，深く子房部に締められるために花弁に反りをみせる。子房部はうずたかくつけられ，内に蓮子を１＋８（復元推定）を入れている。周縁は素文の地に１段を画して，面違い鋸歯文帯をめぐらしている。下顎部は平行叩きを残す。瓦当面全体に糸切り痕を残す。面径18～18.8cm（復元推定）。子房径不明（新治廃寺出土のものは5.5cm）。厚さは薄手，中手，厚手があり，薄手は黒鼠色を呈し，厚手のものは暗褐色を呈する。

Ⅰ類Ｂ群鋸歯文縁複弁八葉花文軒丸瓦（第４図３～５）　Ａ群に瓦当面の構成は似るが，子房は細い凸線によって輪郭をもって区画されており，花弁はＡ群より反りはみられず，線も肉乗りを失っている。ここに表示したＢ群の３～5のものは，子房内の蓮子の間に笵割れが同じようにみられることから，同笵であろう。ただ３については瓦当面がかなり崩れても笵傷が同じ所にみられる。面径，子房とも１割ほど大きい。

Ⅱ類　鋸歯文縁単弁十六葉花文軒丸瓦（第４図６）　Ⅰ類の複弁花文の花弁がこまかくわかれて単弁となるものである。弁子はさらに細ながくなり，輪郭線もほそく，肉乗りをうしなっている。子房はややうずたかくしているが，その周縁に細い隆帯をめぐらしている。この形式はⅠ類Ａ群，Ｂ群の折衷のようなものである。蓮子は１＋８をいれている。周縁は，素文の内側に１段を画し面違い鋸歯文をめぐらし二重にみえる。この鋸歯文の鋸歯は，あらい波状の陰刻線を描くように付されており，Ⅰ類とは施文法が異なる。面径は19.4cm，子房径６cmでやや薄手である。

軒平瓦　重弧文系と唐草文系のものに分けられるが，素文が１点出土している。

三重弧文軒平瓦（第５図１）　新治廃寺出土で分類された薄手で段顎部は８

mmほどの浅いものである。重弧文は手描きで三角状に5mmほど掘り込んでいる。凸面は瓦当面に直角に平行叩き痕を残す。胎土は緻密で，色調は灰褐色を呈している。

唐草文軒丸瓦（第5図2～5）　内区の唐草文の配置は，中心飾の左右に均等に配されており，内区線の外側には細粒48の珠文をつけ，突起した二段の外周がこれを包んでいる。この唐草文は同笵のものと思われるものが多くみられるが，凸面の叩きが縄叩きと，格子叩きの2種の他，ヘラ削りのものの計3種がみられる。

格子目叩き　格子は長方形を呈し，長辺17mm，短辺5mmで瓦当面に直角にみられる。この叩きは平瓦にもみられ，この叩きのあるものは，凹面の布目を削り取っている。唐草文は比較的シャープである。特徴としては，中心飾の左1段目の右下から左上に反転する草文に笵癖がある。

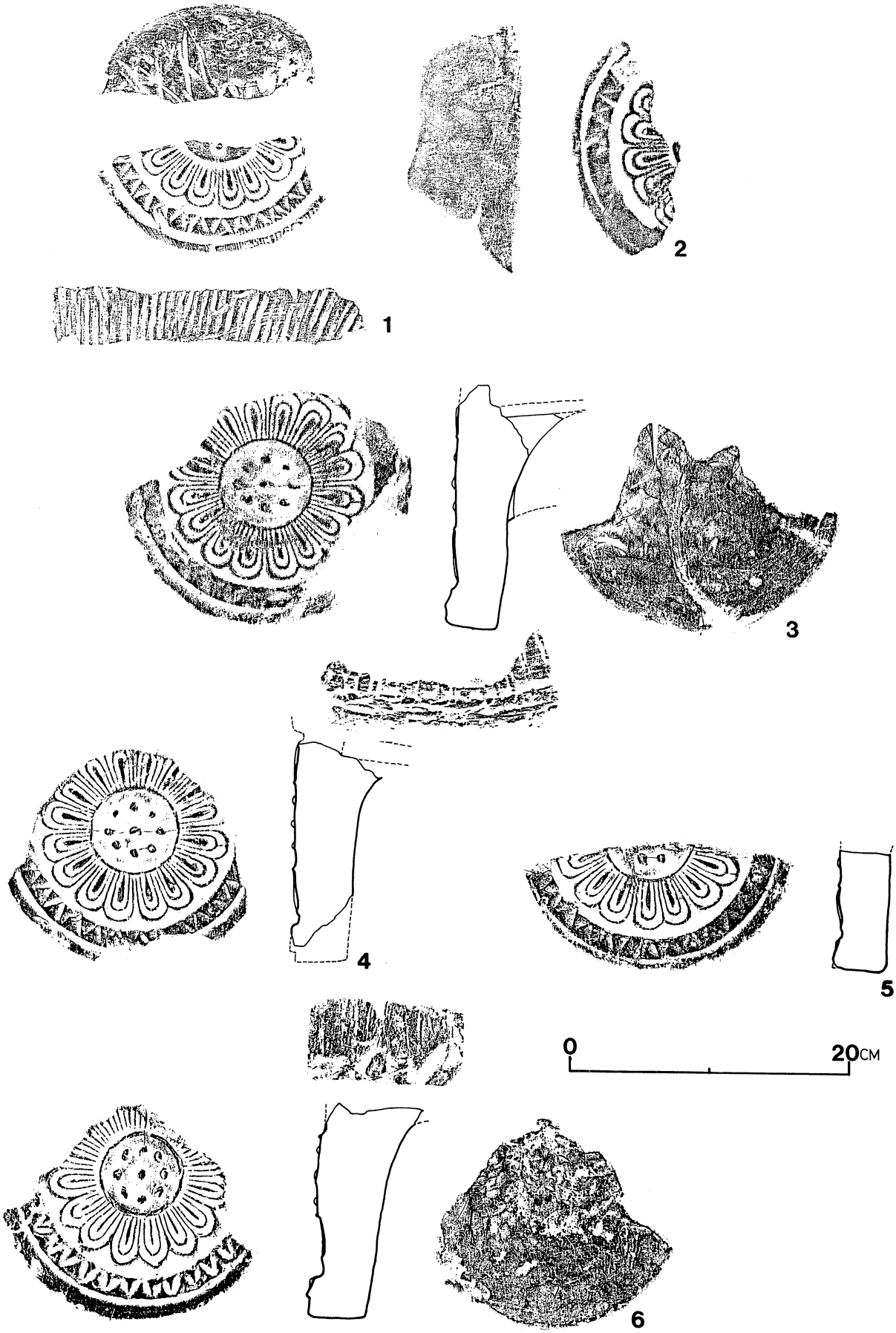
縄目叩き　荒いＲＬ撚りの縄文を横まきにして瓦当面に直角に叩いている。格子叩きのある軒平瓦の外区は2段の外周がみられるが，この種のものは1段の外周のみで，わずかに内側の段の痕跡が一部に認められる。唐草文は比較的シャープであり，格子叩きの軒平瓦に認められる中心飾の左1段目の唐草に，同じような笵癖をみることができる。凹面は糸切り痕が明確で，布目痕がわずかに糸切りの凸面部に確認できる。

ヘラ削りの平瓦は，凸凹両面ともヘラ削り調整が施されたもので，第5図5にみられるように，縄目叩きをヘラ削りで消しているものもみられる。瓦当面の唐草文は，比較的シャープなものと，二度押しのため文様が甘くなっているものもあるが，他の唐草文と同じ傾向をもつ。

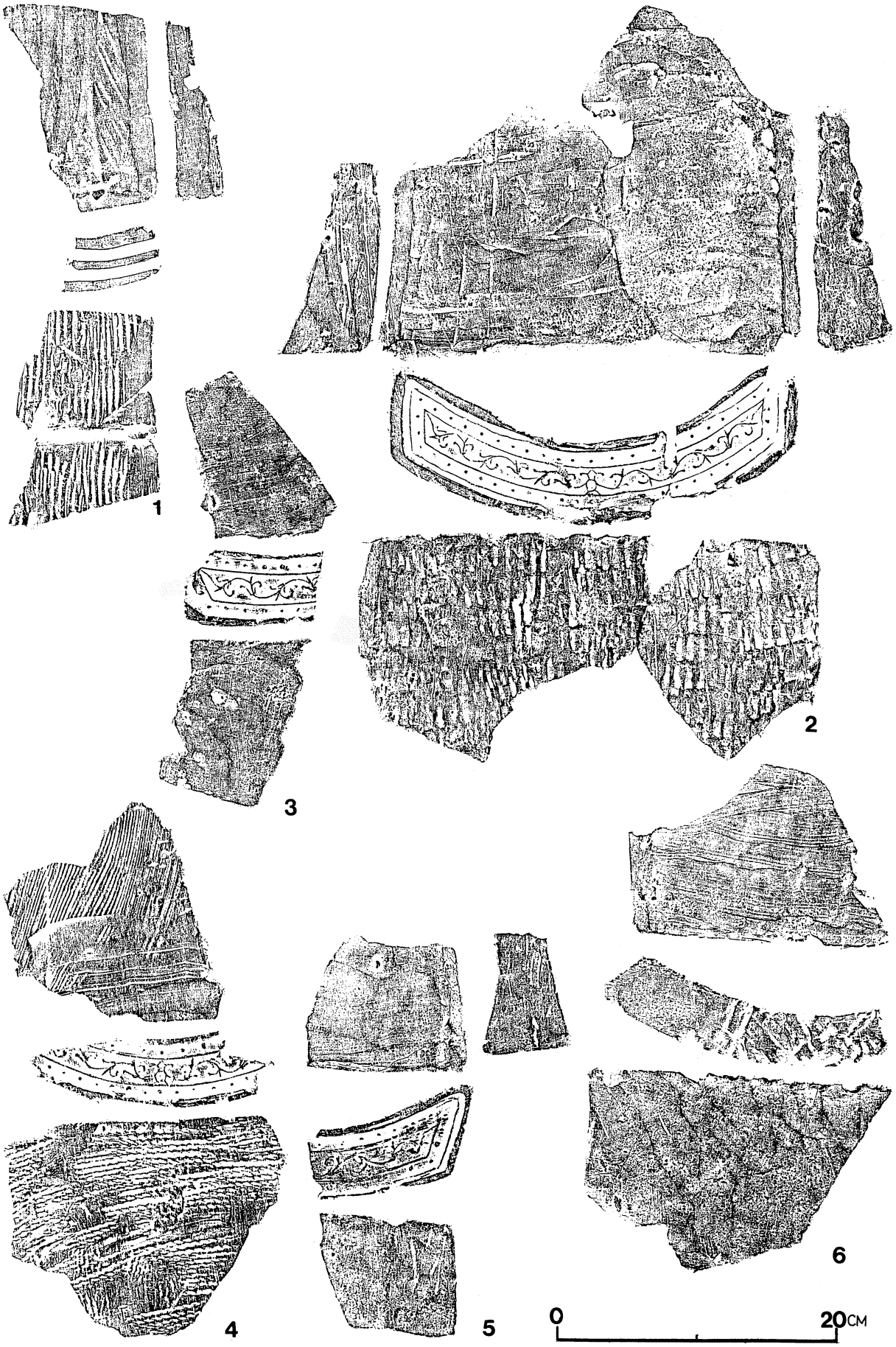
平瓦　凸面調整痕は平行叩き，格子叩き，縄目叩き，素文（ヘラ削り，ナデ）等がみられるが，各々の数の比率は予備調査のこともあり，本調査後にまとめたい。

丸瓦　本瓦葺用と行基葺用の2種に分けられる。本瓦葺用は玉縁で，凸面の調整は素文が中心で，破片の数が少ないため計測はできない。行基葺用は格子目叩き，平行叩き，素文の3種が認められる。

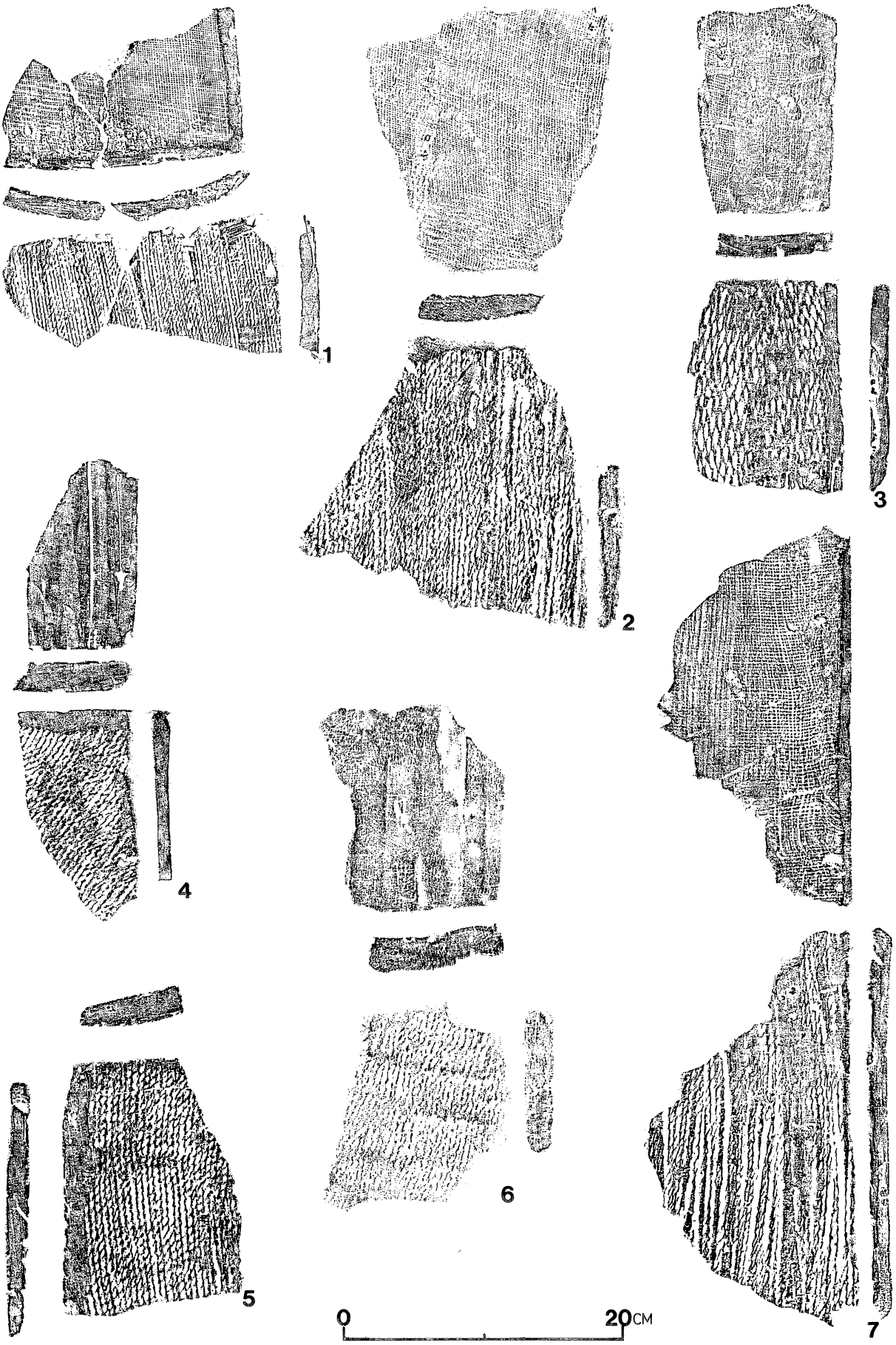
今回の予備調査で瓦窯跡から取り上げた一部の瓦，灰原から採集したもの，周辺部で表採したものの一部を報告したが，いずれも高井悌三郎『常陸国新治郡上代遺跡の研究』1944で報告された瓦類と一致するものである。特に軒丸瓦Ⅰ種Ｂ群のものは，子房内にみられる笵割れの特徴から同笵であることが確認されたが，同じものが上野原瓦窯跡，新治廃寺にもみられ，当時の瓦生産の実態をみることができる。なお，今回分類した軒丸瓦は，前掲報告書の複弁第一種＝Ⅰ類Ａ群，第二種＝Ⅰ類Ｂ群，単弁第一種＝Ⅱ類である。



第4図　軒　丸　瓦

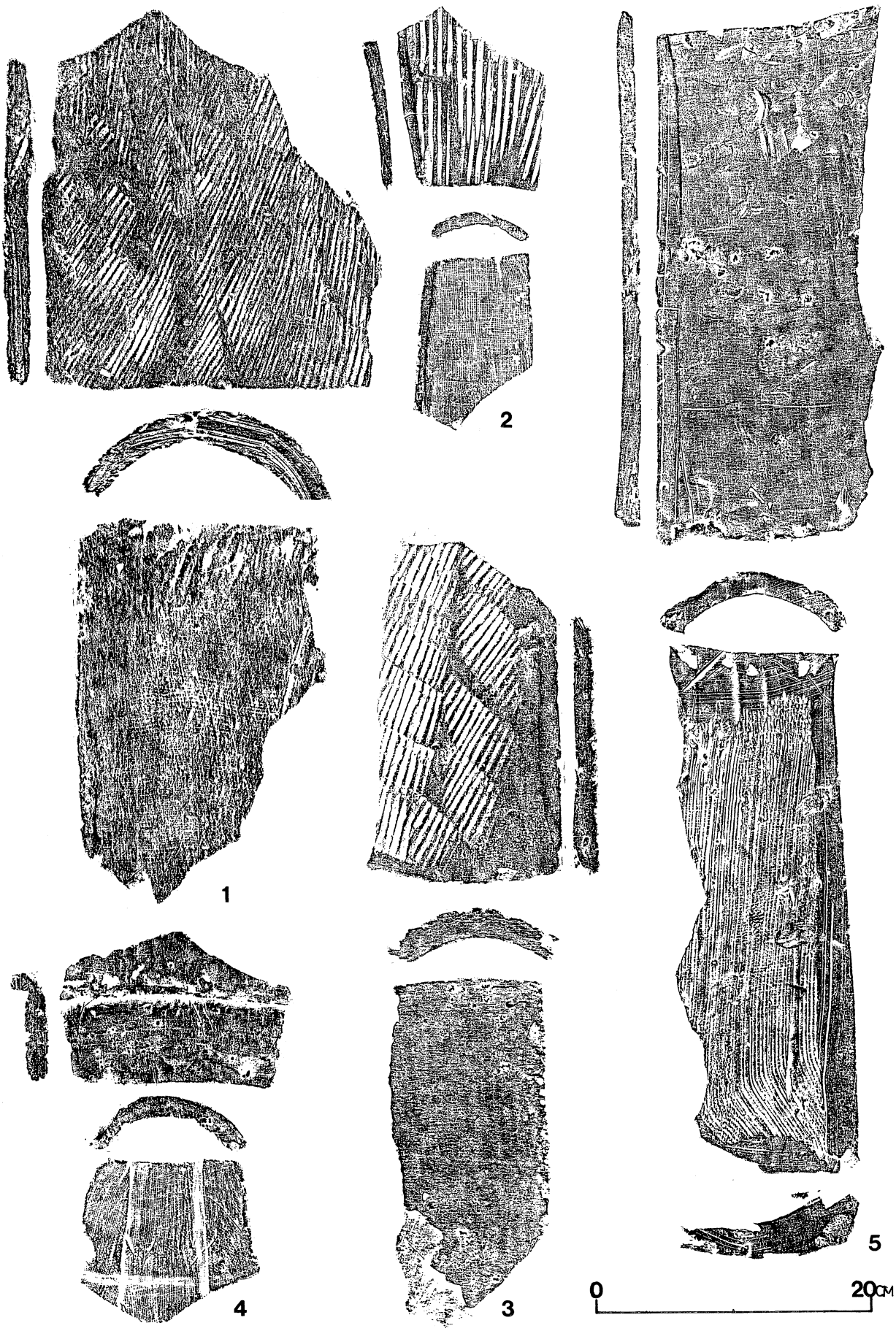


第5図　軒　平　瓦



第6図　平瓦 ―縄目叩き―

第７図　平瓦 ―格子叩き・平行叩き・素文― （3,4,7,8は１号炉配水溝内出土）



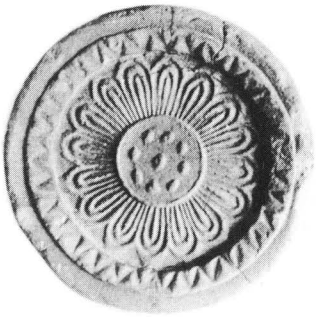
第8図　丸　　瓦

1110

1111

1112

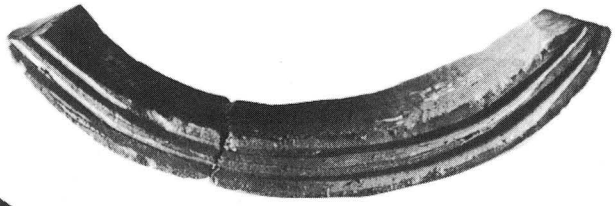
1120



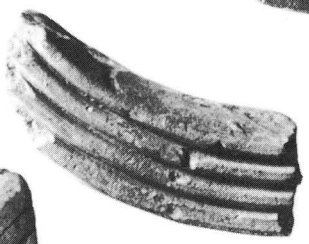
1121

1122

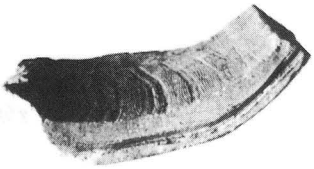
1130



1231

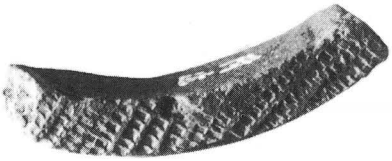


1230



1232

1220



1240

1210

1250

第９図　新治廃寺式屋根瓦（軒丸，軒平）基礎資料

上下　遠景

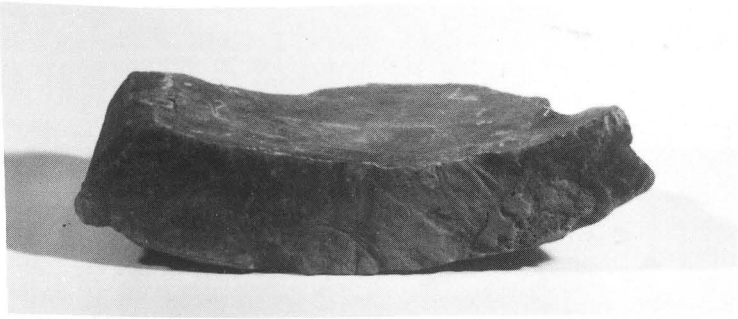
上下　1号瓦窯跡

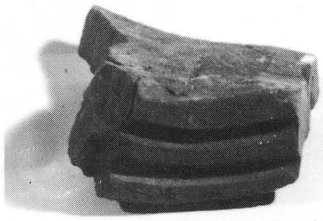
上　1号瓦窯跡　　下　2号炉

1号銅製錬炉

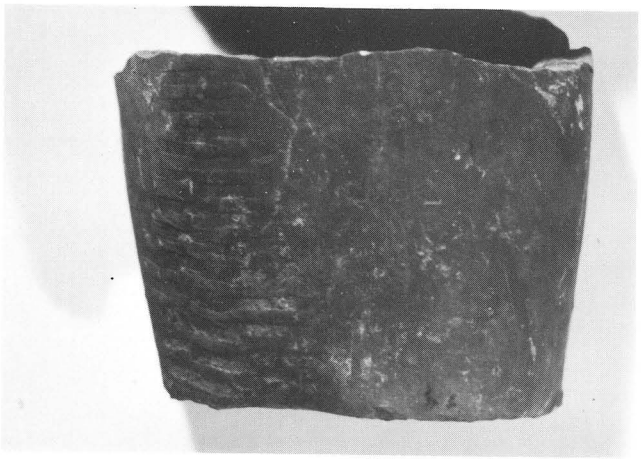
軒 丸 瓦 (1)

軒 丸 瓦 (2)





軒　平　瓦



丸　瓦

新治廃寺
―― 久地楽長町窯跡予備調査報告書 ――

発行日	昭和59年3月27日
発行所	協和町教育委員会 茨城県真壁郡協和町大字門井1962の2 〒309-11 電話 029657 2511（代）
編集	協和町教育委員会
印刷所	ワタヒキ印刷株式会社 水戸市城東1丁目5－21 電話 0292 21 4381（代）